

日本人成人の相互独立性¹⁾

— クラスタ分析による類型的理解の試み —

高 田 利 武*

The independent self characterizing Japanese adults:
- A tentative taxonomy based on cluster analysis

Toshitake TAKATA

要 旨

日本文化に於ける相互協調的自己観の優勢にも拘わらず日本人成人の相互独立性は相互協調性を凌ぐ、と言う従来の知見に立脚し、日本人成人の相互独立性に随伴する諸特性を闡明すると共に、それら諸変数の連関に基づく成人の発達の類型化を、3つの調査を通じて試みた。その結果、(1)相互独立性が高く相互協調性が低いと共に肯定的自己認識が顕著な相互独立性優勢型、(2)一定程度の相互独立性と相互協調性を具備すると共に肯定的自己認識も持つ独立性・協調性拮抗型、(3)相互協調性が高く相互独立性が低いと共に批判的自己認識が顕著な相互協調性優勢型、の3類型が見出された。親となることを通じた人格的発達が最も顕著であるのは相互独立性優勢型の若年成人であり、反自己中心的規範意識と権威主義という老人期に見られる特性を示したのは、独立性・協調性拮抗型の中年成人であった。相互協調性優勢型は人格的発達も老人期的特性も示さなかった。

問 題

Markus & Kitayama (1991) の提唱以来10余年、文化的自己観 (cultural view of self) の概念は、文化と心理との相互構成過程に係わる概念として、広く人口に膾炙するに至った。彼等に依れば、或る文化に於いて歴史的に作り出され、暗黙に共有されている自己に就いての前提や通念が文化的自己観であり、相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) の2つに大別される。前者は、自己を他者から分離した独自の実体として捉えるものであり、西欧、就中、北米中産階級に典型的である。ここでは、自己は或る個人の持つ様々な特性に依って定義されるが、それは周囲の状況とは独立なものである。後者は、他者と互いに結び付いた人間関係の一部として自己を捉える考えで、日本を含む亜細亜の文化に於いて一般的とされる。

相互独立的自己観であれ相互協調的自己観であれ、文化的自己観は、或る集団の成員に共通する価値や観念のシステムである社会的表象 (social representation) であり (北山, 1998)、必ずし

平成14年9月25日受理 *社会学部人間関係学科

も個々の成員の考え方そのものではない。従って、特定文化に属する個人、例えば日本人全員が一律な相互協調的自己観を持っている訳では勿論ない。併し、社会的表象は何等かの形で個人の価値や信念に反映され、個人の持つ自己の認識に影響する。ここで、人間という存在が個性的側面を持つと同時に社会的側面を持つ点に着目すれば、相互独立的自己観は個性的存在としての人間、相互協調的自己観は社会的存在としての人間を焦点にしていると考え得る。各々の側面を強調した捉え方が2つの自己観であると仮定すれば、所属する文化に拘わらず如何なる個人も双方の自己観に即した考え方を持つことが出来、2つの自己観が個人に反映された程度による個人差が生じる、という視点が成立する。従来公刊されている文化的自己観尺度は、全て斯様な観点から作成されている (Singelis, 1994; 木内, 1995; 高田・大本・清家, 1996)。

社会的表象である文化的自己観が個人の自己認識に内面化される過程を発達的に検討すべく、高田 (1999; 2001a; 2002c) は、相互独立的-相互協調的自己観尺度 (高田他, 1996; 高田, 2000a) を小学校高学年児童から老人に至る年齢段階の対象者に実施した横断的資料を屢次収集している。処が、日本文化に特徴的とされる相互協調的自己観が内面化されている程度、及び、これも日本人の自己認識に特徴的な自己批判的傾向 (Heine, Takata & Lehman, 2000) は、高校生・大学生を中心とする青年期に最も顕著であり、成人期以降は寧ろ相互協調性は低下し相互独立性が高まると共に自己肯定的になる、という傾向が一再ならず見出されている。これは、長期の社会的適応を経た成人は、文化・社会的特徴とされる価値や規範をより体現しているという、一般的通念と一見矛盾する傾向である。

この傾向を高田 (1999; 2002c) は以下のように解釈している。即ち、日本文化で優勢な相互協調的自己観が個人の認知的表象に直接反映されるのが「1 次的反映過程」であり、それは自己再構成期たる青年期に主に生じる。それに対し、青年期に内面化された相互協調的自己観に規定されつつ、日本文化に於いても理解することは可能な相互独立的自己観が個人に取り込まれるのが「2 次的反映過程」であって、成人期に相互独立性が上昇すると同時に相互協調性が一時低下する傾向は、その一局面であると理解される。従って、相互独立性の高まりと肯定的自己認識を齎す2 次的反映過程は、人間の持つ社会性と個別性が日本文化の枠内で統合される一種の人格的発達過程であるとも考え得るのである。

他方、中国人や越南人も相互独立性の高さを示すが、それら亜細亜の文化に見られる相互独立性には、西欧文化の相互独立的自己観とは些か異質なものを含むことが指摘されている (高田, 2000b)。同様な事情は、日本人成人の示す相互独立性の高さにも該当する。例えば、老人期に至る加齢に伴う日本人の相互独立性の伸張には相互協調性の上昇が付随していること (高田, 1999; 2000a; 2001a)、相互独立性と相互協調性の双方が高い——日本文化での人格的発達を遂げたとすべき老人には、相互独立性と混同され易い自己中心的行動を排斥する規範意識や、権威主義が著しい (高田, 1998)、等がそれである。これは、上述の如き2 次的反映過程を伴う「人格的発達」には、秩序意識や現状肯定観が分かち難く付随していることを示唆する。

翻って、人格的側面に限らず心理的発達過程には必ず個人差が存在する。従って、歴年輪的には成人と一括される人々であっても、相互独立性と相互協調性の程度、及び、肯定的自己認識を軸とする発達の内容には、個人に依り可成の差異が見られるであろう。そこで、本研究に於いて

は、日本人成人に見られる相互独立性の高さに付随する諸要因を探ることを通じて、2 次的反映過程の性質を検討すると同時に、その内容の相違に応じて成人を幾つかの類型に分類することを試みる。この作業を通じて、日本文化に於ける「人格的発達」の意味内容を闡明すると共に、その発達過程に関して示唆が得られることが期待される。

上述の如き論議に基づき、本稿では日本人成人を対象とした3つの調査を報告する。先ず研究Ⅰでは、一定の人格的発達を齎すと従来されている「親となる」ことと、相互独立性、相互協調性、肯定的自己認識の3変数が如何なる関係を持つかを検討し、相互独立性の伸張と肯定的自己観が人格的発達と結び付いていることを確認する。次いで、研究Ⅱと研究Ⅲでは、そのような成人期の相互独立性と自己肯定感の高揚が、老人期に見られる反自己中心規範意識(研究Ⅱ)、或いは権威主義(研究Ⅲ)を伴っているかを検討し、2 次的反映過程に依る人格的発達の内容を更に詳らかにすることを試みる。

研究Ⅰ

目 的

柏木・若松(1994)は、成人期に於ける人格的発達が「親となる」ことを通じて促進され、それは特に母親に著しいことを報告している。成人期以降に見られる相互独立性の伸張が2 次的反映過程の結果であり、それが人格的発達を含意するものであるならば、成人の相互独立性や肯定的自己認識と、親になることから生じる変化との間には、何等かの関連があることが予想される。これらの予想を検討することが研究Ⅰの目的である。

方 法

対象者：(1) 近畿圏の私立甲幼稚園、(2) 首都圏の私立乙幼稚園に通う3～5歳の幼児を持つ両親を対象とした。回答不完全者14名を除いた分析対象者の内訳は、父親257名((1) 105名：平均年齢37.4歳；レンジ26～51歳、(2) 152名：平均年齢35.3歳；レンジ25～47歳)、母親274名((1) 111名：平均年齢34.5歳；レンジ26～44歳、(2) 163名：平均年齢33.8歳；レンジ24～59歳)である。尚、殆どの測定尺度で両園間に有意差は認められなかった為、以後の分析は双方を合併して行なった。調査票は担任教員を通じて家庭に配布され、数日後に回収された。調査実施時期は2000年11月～12月である。

質問紙：以下の諸測定尺度から構成される。

(1) 相互独立的-相互協調的自己観尺度：相互独立性・相互協調性各10項目から成る(項目の具体的内容は高田(2000a)参照)。7(非常にあてはまる)～1(全くあてはまらない)の7段階評定尺度。

(2) 親の発達尺度：6因子構造49項目から成る柏木・若松(1994)の原尺度の内、各因子で負荷量の高い25項目を抜粋して実施した(表2参照)。4(そうだった)～1(そうだったとは思わない)の4段階評定。

(3) 自己認識質問票：想起された自己認識の手段を測定する高田(2001a；2002c)の質問紙の

前半を用い、肯定的及び否定的形容詞各15個、合計30個の中から自分に当てはまるもの5個を選択する(各形容詞の内容については高田(2001a; 2002c)参照)。

結果と考察

相互独立性・相互協調性の水準：各10項目の平均を尺度値とした(夫々の α 係数は.83、.75)。高田(1999; 2000a)の年齢区分に沿って、2・30代の若年成人417名(平均年齢33.7歳：男性180名、女性237名)と4・50代の中年成人114名(平均年齢42.2歳：男性77名、女性37名)とに分け、男女毎の平均値を示したのが表1である。従来の知見(高田, 1999; 2000a)に依れば、男性は女性より、亦、中年成人は若年成人より相互独立性は高く相互協調性が低いことが判明しているが、性別に関してはこれと一致する結果が年齢×性別の分散分析を通じて得られた(性別の主効果は相互独立性： $F(1,527)=48.93$ $p<.001$ 、相互協調性： $F(1,527)=19.87$ $p<.001$)。併し、年齢差に関しては、全体に従来の知見と一致する方向ではあるが、有意差はない(年齢の主効果は相互独立性： $F(1,527)=0.01$ 、相互協調性： $F(1,527)=0.25$)。

表1 相互独立性・協調性の平均値

	研究Ⅰ		研究Ⅱ		研究Ⅲ	全対象者		
	若年成人	中年成人	若年成人	中年成人	中年成人	若年成人	中年成人	
相互独立性	男性	4.62(.81)*	4.60(.82)*	4.82(.75)	4.62(.87)	4.64(.67)	4.64(.81)*	4.62(.79)**
	女性	4.12(.78)***	4.16(.67)**	4.38(.94)	4.70(.67)	4.44(.73)	4.16(.81)***	4.49(.72)
	平均	4.33(.83)***	4.46(.80)**	4.54(.89)	4.66(.76)	4.53(.71)	4.36(.84)***	4.56(.70)***
相互協調性	男性	4.56(.66)	4.49(.64)	4.30(.92)	4.38(.83)	4.59(.61)	4.52(.70)	4.49(.69)
	女性	4.80(.67)*	4.81(.47)*	4.72(.69)	4.42(.73)*	4.79(.73)	4.79(.68)*	4.64(.71)
	平均	4.69(.68)	4.60(.61)	4.57(.80)	4.40(.76)	4.69(.68)	4.68(.70)	4.56(.70)

()内は標準偏差。* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ で従来の知見と有意に異なる。相互独立性・相互協調性共、最大7、最小1

更に、大量資料の平均値(高田, 2000a)と比較すると、各セル共、相互独立性の平均値は有意に低い(若年男性： $t(179)=2.21$ $p<.05$ 、若年女性： $t(236)=4.99$ $p<.001$ 、若年全体： $t(416)=4.60$ $p<.001$ 、中年男性： $t(76)=1.99$ $p=.05$ 、中年女性： $t(36)=3.44$ $p<.01$ 、中年全体： $t(113)=3.21$ $p<.01$)。亦、相互協調性に関しても、女性の場合は大量資料の平均値に比較して有意に高い(若年女性： $t(236)=2.06$ $p<.05$ 、中年女性： $t(36)=2.31$ $p<.05$)。従って、原因は未詳であるが、今回の資料は年齢・性別を問わず従来に比して相互独立性が低く、更に女性で相互協調性が高いという特性を持つと言える。

親の人格的発達の側面：因子分析(主成分解、バリマックス回転；累積寄与率57.9%)の結果を表2に示す。これに基づき、(1) 個の主張(自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった等)、(2) 他者との親和(人との和を大事にするようになった等)、(3) 社会的関心(日本や世界の将来について関心が増した等)、(4) 我の抑制(思い通りにならないことがあっても我慢できるようになった等)、(5) 包容力(他人に対して寛大になった等)、(6) 子への関心

(子どもへの関心が強くなった等)、の6因子を解釈した。この内、「個の主張」「包容力」は柏木・若松(1994)の「自己の強さ」「柔軟さ」の各因子と略対応している。他方、「他者との親和」「私の抑制」は柏木等の「自己抑制」が分裂したものであり、「社会的関心」「子への関心」は柏木等の「運命・信仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「視野の広がり」の各因子が混淆したものである。

表2 親の発達尺度の因子分析

質問項目	因子						
	1	2	3	4	5	6	
物事に積極的になった。	.723	.266	.035	.084	.194	.160	(自強)
自分の立場や考えは主張しなければと思うようになった。	.634	.214	.185	.150	.101	.174	(自強)
いろいろな角度から物事を見るようになった。	.552	.286	.256	.264	.241	.032	(柔)
人との和を大事にするようになった。	.285	.707	.191	.220	.189	.183	(自抑)
他人の立場や気持ちをくみとるようになった。	.303	.628	.200	.269	.286	.123	(自抑)
他人の迷惑にならないように心がけるようになった。	.206	.588	.172	.245	.152	.198	(自抑)
日本や世界の将来について関心が増した。	.334	.022	.625	.092	.098	.111	(視)
環境問題(大気汚染・食品公害など)に関心が増した。	.102	.196	.593	.107	.137	.160	(視)
児童福祉や教育問題に関心をもつようになった。	.012	.162	.530	.184	.230	.292	(視)
伝統や文化の大切さを思うようになった。	.427	.121	.441	.207	.144	.067	(運)
常識やしきたりを考えるようになった。	.403	.270	.419	.243	-.027	.053	(運)
思い通りにならないことがあっても我慢できるようになった。	.251	.154	.162	.808	.130	.084	(自抑)
自分本位の考えや行動をしなくなった。	.254	.259	.142	.589	.228	.144	(自抑)
自分のほしいものなどが我慢できるようになった。	.080	.294	.210	.471	.080	.145	(自抑)
どの様な人にもその人なりの良さがあると感じるようになった。	.364	.325	.231	.401	.140	.170	(視)
考え方が柔軟になった。	.198	.199	.204	.175	.782	.114	(柔)
他人に対して寛大になった。	.149	.131	.136	.098	.533	.305	(柔)
精神的にタフになった。	.256	.221	.111	.251	.381	.199	(柔)
生きている張りが増した。	.221	.097	.182	.041	.384	.380	(生)
子どもへの関心が強くなった。	.062	.072	.154	.131	.062	.636	(生)
子ども好きになった。	.160	.189	.063	.054	.263	.612	(生)
一人一人がかけがえのない存在だと思うようになった。	.284	.336	.272	.316	.170	.367	(視)

()内は柏木・若松(1994)における因子。

自強=自我の強さ、柔=柔軟さ、自抑=自己抑制、視=視野の広がり、運=運命・信仰・伝統の受容、生=生き甲斐・存在感

父親と母親の発達得点差：各因子に含まれる項目の評定平均値を発達得点とした。夫々の α 係数は、個の主張=.80、他者との親和=.85、社会的関心=.77、私の抑制=.79、包容力=.73、子への関心=.63であり、「子への関心」に稍問題が残るが概ね充分な数値と考えられる。年齢別に各得点の父親と母親の平均を示したのが表3である。各平均値の midpoint (2.5) からの隔たりは、中

年父親の「個の主張 ($t = 1.41$)」と「私の抑制 ($t = 1.70$)」以外は何方も有意で (若年父親: $t (179) = 2.28 \sim 18.71 p < .05 \sim .001$ 、若年母親: $t (236) = 7.62 \sim 28.36 p < .001$ 、中年父親: $t (76) = 2.70 \sim 8.97 p < .05 \sim .001$ 、中年母親: $t (36) = 3.01 \sim 10.11 p < .01 \sim .001$)、親となることで自らが変化したと認知していると言える。但し、何方の因子に於いても、母親の得点は父親より有意に高く (年齢×性別の分散分析の性別の主効果は、個の主張: $F (1,527) = 3.36 p < .07$ 、他者との親和: $F = 49.60 p < .001$ 、社会的関心: $F = 28.01 p < .001$ 、私の抑制: $F = 44.59 p < .001$ 、包容力: $F = 7.35 p < .01$ 、子への関心: $F = 7.50 p < .01$)、母親は父親よりも変化を大きく感じており、柏木・若松 (1994) の知見を追認している。尚、年齢の有意な主効果は、「子への関心」で若年成人の変化が大きい傾向差が見られる以外は ($F (1,527) = 2.89 p < .09$)、何方の因子でも見られない ($F = .01 \sim .75$)。

表3 発達得点の平均値

		個の主張	他者との親和	社会的関心	私の抑制	包容力	子への関心
若年成人	父親	2.74(.82)	2.83(.77)	2.71(.70)	2.65(.74)	2.83(.60)	3.32(.60)
	母親	2.64(.70)	3.28(.61)	2.99(.57)	3.05(.61)	2.98(.60)	3.46(.52)
中年成人	父親	2.64(.74)	2.86(.80)	2.70(.75)	2.64(.85)	2.80(.77)	3.21(.70)
	母親	2.82(.65)	3.23(.68)	3.06(.42)	3.04(.60)	2.92(.63)	3.36(.52)

()内は標準偏差。各側面共、最大4、最小1。

肯定的自己認識: 自分に当てはまるとして選択された5つの形容詞の内、肯定的形容詞の占める割合 (%) を各対象者毎に算出し、その平均値を各セル毎に求めた結果、父親 (若年: 59.2%、中年: 67.9%)、母親 (若年: 57.2%、中年: 59.9%) となった。何方も50%を越え自己を肯定的に認識している。亦、この傾向は父親では加齢と共に高まっており ($t (255) = 2.08 p < .05$)、これは従来の知見 (高田, 2001a; 2002c) と一致する。但し、母親の場合は有意ではない ($t (272) = 0.58$)。

各指標によるクラスタ分析: 上記各指標が個々の親自身の中でどう関連しているかを検討するべく、相互独立性、相互協調性、肯定的自己認識率、6因子毎の発達得点の各変数を類別変数とし、ケースのクラスタ分析 (Ward法、以下同様) を年齢群別に行なった結果、若年成人では4クラスタ、中年成人では3クラスタが夫々析出された。各クラスタ別に各変数の平均値を示したのが表4である。

若年成人の場合、クラスタ1では、表1に示した相互独立性と相互協調性の若年成人の平均値に比して、相互独立性は有意に高く ($t (154) = 5.18 p < .001$)、相互協調性は有意に低い ($t = 2.44 p < .05$)。クラスタ2では両者共平均値と有意な差はない (相互独立性: $t (97) = 0.09$ 、相互協調性: $t = 0.22$)。クラスタ3では相互独立性は有意に低く ($t (91) = 3.40 p < .001$)、相互協調性は有意に高い ($t = 2.83 p < .01$)。クラスタ4では相互独立性が有意に低いが ($t (71) = 4.04 p < .001$)、相互協調性には有意差はない ($t = 0.13$)。以上、相互独立性と相互協調性の関係に着目すれば、クラスタ1は相互独立性優勢型、クラスタ2は相互協調性が高いが相互独立性も拮抗している型、

表4 各クラスターの平均値

	相互独立性	相互協調性	肯定的 自己認識率(%)	個の主張	他者との親和
若年成人					
クラスター1 (n=155)	4.67(.79) _a	4.57(.65) _{ad}	87.97(9.19) _a	3.00(.81) _a	3.20(.73)
2 (n=98)	4.35(.71) _b	4.69(.61) _{acd}	60.41(1.61) _b	2.78(.71) _b	3.04(.78)
3 (n=92)	4.06(.78) _c	4.90(.66) _b	41.05(3.95) _c	2.57(.63) _b	3.01(.66)
4 (n=72)	3.94(.84) _c	4.71(.79) _{bc}	12.22(9.51) _d	2.68(.72) _b	2.99(.64)
F値 (df=3,413)	19.43***	4.49**	711.80***	7.77***	2.28
中年成人					
クラスター1 (n=30)	4.78(.86) _a	4.58(.78)	100.00(0.00) _a	2.87(.86)	3.02(.85)
2 (n=49)	4.52(.80) _a	4.59(.54)	68.54(9.57) _b	2.69(.78)	2.90(.78)
3 (n=35)	4.10(.61) _b	4.61(.54)	30.95(9.54) _c	2.56(.74)	3.06(.74)
F値 (df=2,111)	6.59**	0.04	407.18***	1.22	0.44
	社会的関心	私の抑制	包容力	子への関心	
若年成人					
クラスター1 (n=155)	3.03(.64) _a	3.01(.69) _{ac}	3.07(.58) _a	3.54(.48) _a	
2 (n=98)	2.79(.61) _b	2.84(.70) _{cd}	2.97(.60) _a	3.44(.53) _a	
3 (n=92)	2.81(.63) _b	2.79(.66) _{bd}	2.80(.58) _b	3.25(.62) _b	
4 (n=72)	2.71(.62) _b	2.74(.73) _{bd}	2.64(.57) _b	3.24(.57) _b	
F値 (df=3,413)	5.98***	3.54*	10.65***	7.89***	
中年成人					
クラスター1 (n=30)	2.79(.75)	3.01(.87) _a	2.84(.87)	3.30(.76)	
2 (n=49)	2.85(.63)	2.60(.67) _b	2.82(.74)	3.23(.63)	
3 (n=35)	2.79(.72)	2.82(.58) _b	2.86(.59)	3.27(.57)	
F値 (df=2,111)	0.09	3.22*	0.03	0.30	

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した平均値間には多重比較(HSD検定)で5%水準の有意差がある。*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

クラスター3・4は相互協調性優勢型と捉えることが出来よう。

一方、中年成人の場合は、クラスター1の相互独立性は中年成人の平均値(表1)より有意に高いのに対し($t(29)=1.98$ $p<.06$ 、尚、相互協調性($t=0.28$)では有意差はない)、クラスター2では、相互独立性($t(48)=0.41$)も相互協調性($t=0.97$)も有意差はない。他方、クラスター3では、相互独立性は中年成人平均値より有意に低い($t(34)=3.56$ $p<.01$ 、尚、相互協調性($t=0.51$)では有意差はない)。以上に依れば、クラスター1は相対的な相互独立性優勢型、クラスター2は独立性と協調性が拮抗している型、クラスター3は相互協調性優勢型と捉え得る。

各類型の特徴：表4の各平均値を図示したのが図1・図2である。若年成人の場合、高相互独立性-低相互協調性-肯定的自己認識-親になっての発達、という関連から各クラスターが構成されていることが明らかであり、「他者との親和」を除く全ての類別変数に於いて4クラスター間に

1要因分散分析で有意差がある。即ち、クラスタ1(相互独立性優勢型)は各因子で親になることによる発達が最大で、肯定的自己認識の程度は著しい。これに続くクラスタ2(独立性・協調性拮抗型)は、「包容力」と「子への関心」で親としての発達が見られ、自己認識も肯定的方向にある。クラスタ3・4(相互協調性優勢型)は相互独立性が青年期と同様に低く、自己認識は批判的で、発達得点は低い。両者の違いは、批判的自己認識が極端であるか否かにある。

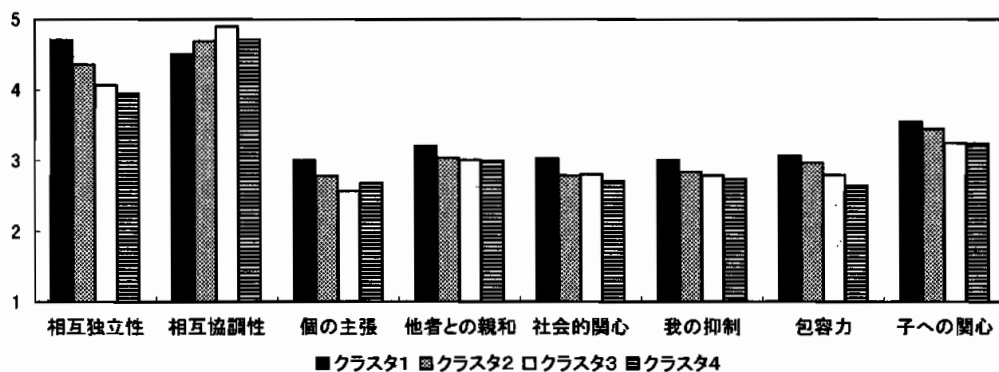


図1 各クラスタの特徴(若年成人)

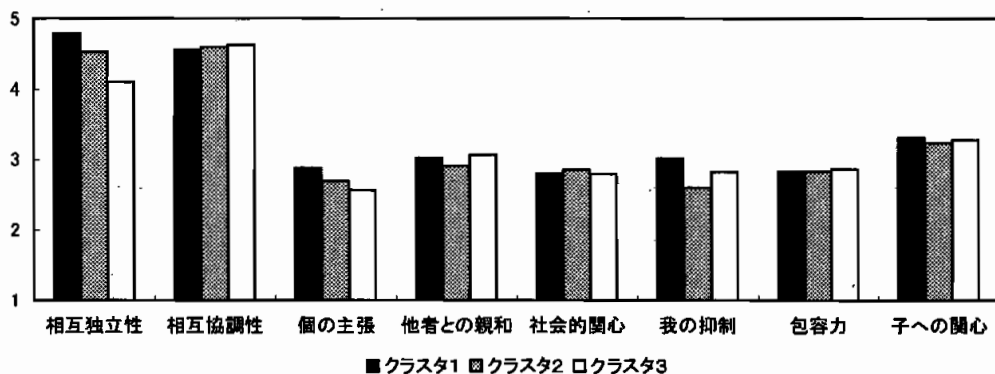


図2 各クラスタの特徴(中年成人)

中年成人に於いては、クラスタ間で有意差のある類別変数は相互独立性と肯定的自己認識率が主で、発達得点の相違は殆ど見られず、僅かに「私の抑制」でクラスタ1は他のクラスタより有意に変化しているのみである。即ち、高相互独立性-低相互協調性-肯定的自己認識-親になっての発達、という若年成人で見られた関連は相対的に弱い。各因子の発達得点自体には年齢による差異はない為、中年成人に於ける相互独立性の伸張は親になることに由来する発達とは然程関連していないと言える。これは、長子が生まれてからの期間が若年成人に比べて長く、その為に親となったことの持つ影響力が相対的に低下していることも考えられるが、今回の調査ではそれに関する調査項目を欠いている。亦、既に見た如く今回の資料は中年成人としては相互独立性が低く偏っていることも加え、明確な結論はこれを導き得ない。但し、若年成人と同様、相互独立性と相互協調性の相対的程度が、肯定的自己認識と深く関連していることは明確である。

各類型での父親と母親の差：各クラスに於ける成長得点の性差を検討した処、若年成人の場合、クラス1では「包容力」を除く5因子で($t(153)=3.56\sim 1.72$ $p<.001\sim .10$)、クラス2では全因子で($t(96)=4.23\sim 1.92$ $p<.001\sim .06$)、クラス3では「他者との親和」「社会的関心」「私の抑制」で($t(90)=2.33\sim 1.84$ $p<.05\sim .07$)、クラス4では「他者との親和」「私の抑制」「子への関心」で($t(70)=4.54\sim 1.88$ $p<.001\sim .07$)、夫々有意或いは傾向差が見られ、何方も母親の得点は父親より高かった。即ち、総じて成長得点の高いクラス1・2で性差が顕著である。亦、若年成人のクラス1～4に属する人数の性差を見ると、男性では順に70名(男性全体の38.9%)、48名(26.7%)、26名(14.4%)、36名(20.0%)、女性では各85名(35.9%)、50名(21.1%)、66名(27.8%)、36名(15.2%)であった。性別×クラスの χ^2 検定で有意差が見られ($\chi^2(3)=11.30$ $p<.01$)、クラス3では相対的に女性(母親)の割合が高い。

一方、中年成人では、クラス1では「他者との親和」で($t(28)=2.22$ $p<.05$)、クラス2では「個の主張」「社会的関心」で($t(47)=2.17, 2.08$ $p<.05$)、クラス3では「子への関心」「他者との親和」「私の抑制」で($t(33)=3.33\sim 1.75$ $p<.01\sim .09$)、夫々有意或いは傾向差が見られ、何方も母親の得点は父親より高かった。即ち、若年成人とは逆に、成長得点の低いクラスで性差が目立つ傾向がある。尚、各クラスに属する人数は、男性では順に24名(31.2%)、31名(40.3%)、22名(28.6%)、女性では夫々6名(16.2%)、18名(48.6%)、13名(35.1%)で、有意な性差は見られない($\chi^2(2)=2.88$)。

このように、相互独立性の上昇に伴う人格的発達を親となることを通じて齎される若年成人の場合、それはとりわけ母親に顕著であり、父親に於いては親となることの占める比重は相対的に低い可能性が示唆される。亦、相対的に親になっての変化を感じていない——人格的発達の少ない者を含む第3クラスには、母親が占める割合が多いことも、女性の人格的成長の中での親となることの重要性を示唆していると理解し得る。このように、幾つかの不明確さが残されるものの、若年成人、就中、母親を中心として、親となることを通じての人格的発達を示している者が、相対的に相互独立性が高く肯定的に自己を認識していることは、当初の予想を支持していると言えよう。

研究Ⅱ

目的

研究Ⅰの結果から、日本人成人に見られる相互独立性の伸張は、肯定的自己認識と人格的発達と関連していることが確認された。他方、高田(1998)は、老人に見られる相互独立性の高さが、肯定的自己認識のみならず、相互協調性の高さ、反自己中心的規範遵守意識、権威主義を伴っていることを見出している。斯様な傾向が相互独立性の高い成人にも見られるか否かを検討することが、研究Ⅱ及び研究Ⅲの目的である。

併せて、肯定的自己認識の指標として研究Ⅰでは形容詞選択法を用いた。この指標は相互独立性の程度に依り規定されることが明確にされてはいるが(高田, 2002c)、肯定的自己認識或いは自尊感情を測定する妥当性が確認された尺度とは必ずしも言えない。そこで、相互独立性と肯定

的自己認識との関連を更に確認するべく、肯定的自己認識の指標としてHarter (1985) による有能観 (perceived competence) 尺度を用い、研究Ⅱでは反自己中心的規範遵守意識との、研究Ⅲでは権威主義との関連を夫々検討する。

方法

対象者：首都圏の公立丙高校卒業者を対象とし、卒業生名簿に基づき無作為に抽出した750名に対し郵送調査を実施した(回答率29.4%)。回答のあった者の内、回答不完全者を除いた内訳は、若年成人69名(男性25名：平均年齢33.4歳；レンジ32～35歳、女性44名：平均年齢33.4歳；レンジ31～37歳)、中年成人130名(男性57名：平均年齢49.5歳；レンジ42～54歳、女性73名：平均年齢48.2歳；レンジ42～59歳)である。調査は2002年1月・7月に実施された。

質問紙：以下の諸測定尺度から構成される。

(1) 相互独立的一相互協調的自己観尺度(高田, 2000a)：研究Ⅰと同様である。

(2) 有能感尺度：Messer & Harter (1986) に依る成人用尺度の日本語訳(藤崎, 1999)で、自己有能感(「知性 (intelligence)」)「仕事 (job competence)」「運動 (athletic competence)」「容姿 (physical appearance)」「社交 (sociability)」「親密な関係 (intimate relationships)」「道徳 (morality)」「ユーモア (sense of humor)」「家事 (household management)」「養育 (nurturance)」「貢献 (adequacy as a provider)」の11側面と全般的自己価値 (global self-worth) を測定する全50項目から、各側面3項目、全般的自己価値4項目を抜粋した37項目から成る。各項目の特性を持った人に、4(とても似ている)～1(全然似ていない)の4段階で回答する評定尺度である。

(3) 規範尺度：相互独立性と似て非なる自己中心的行動(高田, 1998)が、社会的規範にどの程度抵触するかを問う17項目から成る。5(非常に好ましくない)～1(非常に好ましい)の5段階評定尺度。各項目の具体的内容は表6を参照されたい。

結果と考察

相互独立性・相互協調性の水準：尺度の α 係数は夫々.78、.79であった。年齢・性別毎の各々の平均値を表1に示す。女性より男性、及び、若年成人より中年成人は、相互独立性が高く相互協調性は低いと言う従来の知見(高田, 1999；2000a)に沿った傾向が見られるが、年齢×性別の分散分析に依れば、性別(相互独立性： $F(1,195)=0.68$ 、相互協調性： $F=2.18$)と年齢(相互独立性： $F=0.91$ 、相互協調性： $F=1.84$)の主効果は何方も有意ではない。但し、相互独立性に関しては性別×年齢の交互作用が有意で($F=4.50$ $p<.05$)、中年成人では性別の差が見られないという従来とは異なる結果が示されている。

亦、大量資料の平均値(高田, 2000a)と比較すると、若年成人(男女)と男性中年成人では有意差はないが、女性中年成人の相互協調性は有意に低い($t(73)=2.54$ $p<.05$)。従って、年齢と性別の効果に関し今回の資料が従来より微弱な傾向しか示さなかったことは、主に女性中年成人の相互協調性の低さに由来すると言える。

自己有能感：自己価値以外の有能感の側面に就いて、探索的因子分析(主成分分解、バリマックス回転：累積寄与率68.5%)に基づき、Messer & Harter (1986) の原尺度とは稍異なる「社交性」

「知性」「容姿」「運動」「道徳性」「家事」「養育」「ユーモア」の8側面を解釈した。各側面に含まれる項目の平均値を尺度値(1~4)とした($\alpha = .87 \sim .70$)。全般的自己価値($\alpha = .73$)と併せ、夫々の年齢・性別毎の平均値を表5に示す。年齢×性別の分散分析に依れば、「家事」と「養育」で有意な性別の主効果が見られ(夫々、 $F(1,195) = 12.18$ $p < .001$; $F = 4.14$ $p < .05$)、この両側面では女性は男性よりも有能感が高い。これ以外の側面では有意な性別と年齢の効果は認められなかった。

表5 各指標の平均値

		全般的 自己価値	社交性	自己有能感			道徳性
				知性	容姿	運動	
若年成人	男子	2.69(.61)	2.74(.65)	2.90(.52)	2.40(.54)	2.68(.86)	3.17(.47)
	女子	2.65(.65)	2.63(.57)	2.70(.55)	2.35(.75)	2.29(.88)	3.14(.57)
中年成人	男子	2.57(.56)	2.54(.57)	2.85(.66)	2.23(.74)	2.45(.78)	2.94(.66)
	女子	2.75(.53)	2.64(.57)	2.85(.51)	2.38(.66)	2.33(.84)	3.10(.55)
		自己有能感			規範意識		
		家事	養育	ユーモア	個人行動	物欲	対人行動
若年成人	男子	2.60(.76)	2.64(.68)	3.16(.63)	4.45(.34)	3.26(.39)	3.61(.38)
	女子	2.82(.60)	2.73(.74)	3.09(.49)	4.26(.32)	3.18(.39)	3.61(.45)
中年成人	男子	2.45(.64)	2.71(.45)	3.02(.60)	4.34(.37)	3.16(.41)	3.61(.47)
	女子	2.91(.67)	2.87(.59)	3.11(.50)	4.38(.32)	3.25(.45)	3.80(.46)

()内は標準偏差。全般的自己価値と自己有能感は最大4、最小1、規範意識は最大5、最小1。

規範尺度：探索的因子分析(主成分分解、バリマックス回転)に基づき、高田(1998)と同様、(1)個人行動(列の順番を守らない等)、(2)物欲(街頭でティッシュを必ず貰う等)、(3)対人行動(自分に非があっても謝らない等)、の3因子を解釈した(表6参照、累積寄与率42.8%)。各側面に含まれる項目の平均値を尺度値とした($\alpha = .71 \sim .70$)。尺度値が高い程、各行為を規範に抵触すると評価していることを意味する。夫々の年齢・性別毎の平均値は表5に示す通りで、年齢×性別の分散分析に依れば、「個人行動」では年齢×性別の交互作用が有意で($F(1,195) = 4.20$ $p < .05$)、若年成人では男性は女性より規範意識が強いが($t(67) = 1.97$ $p = .05$)、中年成人では性差は見られない。亦、「対人行動」では性別($F = 4.01$ $p < .05$)と年齢($F = 3.25$ $p < .08$)の主効果が、夫々有意或いはそれに近く、女性と中年成人に規範意識が強い。「物欲」では何等の有意差も認められなかった。

各指標による類型：相互独立性、相互協調性、全般的自己価値、規範尺度の3因子の計6変数を類別変数とし、ケースのクラスタ分析を行なった結果、若年成人と中年成人の双方で3クラスタが析出された。各クラスタ別に各変数の平均値を示したのが表7である。

若年成人では、クラスタ1の相互独立性は若年成人の平均値(表1)より有意に高く($t(16) = 10.66$ $p < .001$)、相互協調性は有意に低い($t = 2.43$ $p < .05$)。クラスタ2は若年成人平均値に比し相互独立性は稍高い傾向があるが($t(40) = 1.96$ $p < .06$)、相互協調性($t = 0.46$)は有意差がない。

表6 規範尺度の因子分析

質問項目	因子		
	1	2	3
禁止の場所にペットをつれて行く。	.767	.066	-.025
テーブルマナーを守らない。	.620	.096	.107
列の順番を守らない。	.611	.128	.156
借りたものを返さない。	.585	-.230	.088
道路にゴミを捨てる。	.584	.048	.093
電車の中で大声を出す。	.547	.090	.291
駐車禁止の場所に駐車する。	.394	.142	.011
デパートの粗品は必ず手に入れる。	-.004	.829	.058
買わないのに試食コーナーでは必ず試食する。	.048	.729	.183
街頭でティッシュを必ず貰う。	.033	.661	-.004
電車で席を確保したがる。	.142	.580	.093
バーゲンで他の人が取ろうとした商品を横取りする。	.271	.375	.214
すぐ人に頼み事をする。	-.019	.103	.711
うわさ話が好きである。	.004	.201	.658
自分に非があっても謝らない。	.205	.032	.616
思ったことをすぐ口に出す。	.203	.159	.613
頑固である。	.131	-.042	.582

表7 各クラスターの平均値

	相互独立性	相互協調性	自己価値	個人行動	物欲	対人行動
若年成人						
クラスター1(n=17)	5.68(.44) _a	3.95(.96) _a	3.03(.71) _a	4.47(.40) _a	3.41(.32) _a	3.65(.43)
2(n=41)	4.40(.45) _b	4.61(.53) _b	2.68(.49) _b	4.24(.36) _b	3.13(.42) _b	3.59(.41)
3(n=11)	3.28(.55) _c	5.38(.29) _c	2.02(.51) _c	4.44(.30) _a	3.18(.26) _b	3.63(.48)
F値(df=2,66)	93.83***	15.39***	11.02***	3.25*	3.44*	0.13
中年成人						
クラスター1(n=65)	5.16(.51) _a	3.92(.63) _a	2.85(.51) _a	4.43(.35) _a	3.18(.40) _a	3.63(.45) _a
2(n=41)	4.57(.56) _b	5.03(.54) _b	2.82(.43) _a	4.59(.24) _b	3.45(.50) _b	4.06(.41) _b
3(n=26)	3.94(.57) _c	4.77(.70) _b	2.25(.47) _b	4.28(.35) _a	3.12(.38) _a	3.65(.44) _a
F値(df=2,111)	65.58***	41.90***	21.06***	7.70***	5.42**	9.45***

()内は標準偏差。*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

異なるアルファベットを付した平均値間には多重比較(HSD検定)で5%水準の有意差がある。

クラスター3は平均値より有意に相互協調性は高く($t(10)=9.20$ $p<.001$)、相互独立性は低い($t=7.65$ $p<.001$)。以上に依れば、クラスター1は相互独立性優勢型、クラスター2は独立性・協調性拮抗型、クラスター3は相互協調性優勢型と理解される。

一方、中年成人の場合、平均値(表1)と比べると、クラスター1は相互独立性が有意に高く($t(64)=8.00$ $p<.001$)、協調性は低い($t=6.03$ $p<.001$)。クラスター2は相互独立性は平均的で

($t(40) = 0.93$ ns)、相互協調性は高い ($t = 7.68$ $p < .001$)。クラスタ3は相互協調性が高く ($t(25) = 3.65$ $p < .01$) 相互独立性は低い ($t = 8.07$ $p < .001$)。従って、クラスタ1は相互独立性優勢型、クラスタ3は相互協調性優勢型であると言える。他方、クラスタ2に就いては、相互協調性は高いが相互独立性が平均的であることを考慮すれば、独立性・協調性拮抗型に近いと捉え得よう。

表7の平均値を図示したのが図3・図4である。若年成人では、自己価値が高いのはクラスタ1で、低いのはクラスタ3である。尚、自己有能感の内、「社交性 ($F(2,66) = 5.93$ $p < .01$)」「知性 ($F = 18.51$ $p < .001$)」「容姿 ($F = 4.91$ $p < .05$)」「養育 ($F = 2.85$ $p < .06$)」「ユーモア ($F = 9.26$ $p < .001$)」で、各クラスタ間に自己価値と同様の有意差が見られた。一方、反自己中心的規範意識は「個人行動」と「物欲」のみで差があり、前者はクラスタ2が他より低く、後者はクラスタ1が他より高い傾向がある。中年成人では、自己価値はクラスタ1と2は同程度に高く、クラスタ3は低い。他方、反自己中心規範意識は、3因子の何方でもクラスタ2が他の2群より高い。尚、「運動」を除く自己有能感の各側面に就いても、自己価値と同様のクラスタ間の有意差が見られた ($F(2,129) = 11.40 \sim 3.09$ $p < .001 \sim .05$)。

これらの結果に依れば、各クラスタの特徴を以下の如くに纏めることが出来る。即ち、相互独立性優勢型(クラスタ1)は若年・中年成人の双方共、肯定的自己認識が顕著である。亦、若年

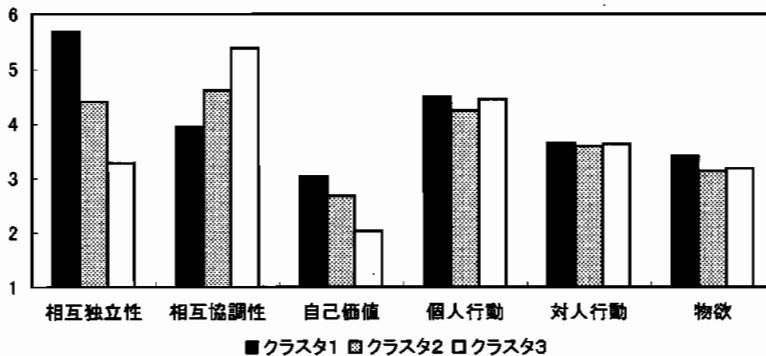


図3 各クラスタの特徴 (若年成人)

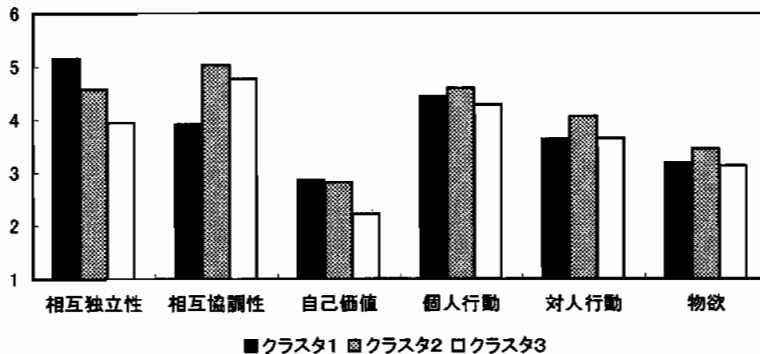


図4 各クラスタの特徴 (中年成人)

成人に限り一部の反自己中心的規範意識が強い。独立性・協調性拮抗型(クラスタ2)も亦、若年成人と中年成人を通じて肯定的自己認識が目立つ。中年成人の場合は、反自己中心規範意識も顕著であるが、若年成人では逆にそれが弱い側面もある。相互協調性優勢型(クラスタ3)は、中年・若年成人の双方で批判的自己認識が顕著であり、反自己中心規範意識は目立たない。従って、肯定的自己認識を持つ一方、反自己中心的規範意識が強いと言う、老人と類似した特性を持っているのは、中年成人の独立性・協調性拮抗型であると言えよう。

研究Ⅲ

目的

前述した如く、成人の相互独立性と関連する相互協調性と肯定的自己認識に加えて、研究Ⅲでは、権威主義の要因を中年成人を対象として検討する。

方法

対象者：近畿の私立丁大学生の父母に郵送調査を実施した。回答者は137名(男性67名、女性70名；回答率50.2%)で、平均年齢は男性50.5歳(レンジ40～59歳)、女性46.3歳(レンジ40～55歳)である。調査は2002年6月に実施された。

質問紙：以下の諸測定尺度から構成される。

(1) 相互独立的一相互協調的自己観尺度(高田, 2000a)：研究Ⅰと同様である。

(2) 有能感尺度(Messer & Harter, 1986)：研究Ⅱと同様である。

(3) 権威主義尺度：与謝野(2000)に依る8項目から成る。各項目の内容は「両親に対する絶対服従」「先祖代々のやり方に従う」「指導者や専門家に頼る」「指導者は下の者に厳格」「伝統や慣習に反するやり方は問題を起こす」「以前からのやり方が最良」「権威ある人々には常に敬意を払う」「目上の人には正しくないと思っても従う」である。5(非常に賛成)～1(非常に反対)の5段階評定を求めた。

結果と考察

相互独立性・相互協調性の水準：平均尺度値($\alpha = .76, .74$)を表1に示す。大量資料平均との差に就いて、相互独立性は男女共に有意でないが(男性： $t(66) = 1.79$ 、女性： $t(69) = 1.17$)、相互協調性は男女共に稍高い傾向がある(男性： $t = 1.92$ $p = .06$ 、女性： $t = 1.86$ $p < .08$)。他方、相互独立性は男性の方が、亦、相互協調性は女性の方が、夫々高いと言う従来の知見の傾向はあるが、双方とも有意な差ではない(相互独立性： $t(132) = 1.56$ 、相互協調性： $t = 1.65$)。

自己有能感：自己価値以外の有能感の側面に就いて、探索的因子分析(主成分分解、バリマックス回転；累積寄与率66.1%)の結果、研究Ⅱと略等しい「社交性」「知性」「容姿」「運動」「道徳性」「家事」「養育」「ユーモア」の8側面を解釈した($\alpha = .88 \sim .60$)²⁾。各側面と全般的自己価値($\alpha = .74$)の性別毎の平均値を表8に示す。全般的自己価値($t(132) = 2.15$ $p < .05$)、知性($t = 2.95$ $p < .01$)、容姿($t = 3.65$ $p < .001$)、運動($t = 5.03$ $p < .001$)は男性の方が、家事($t = 2.99$ $p < .01$)

は女性の方が有能感が高い。これらの内、研究Ⅱの結果と共通するのは「家事」のみである。

表8 各指標の平均値

	全般的		自己有能感		
	自己価値	権威主義	社交性	知性	容姿
男性	2.59(.63)*	2.42(.51)	2.56(.55)	2.71(.49)**	2.42(.62)***
女性	2.35(.67)	2.40(.52)	2.49(.63)	2.44(.54)	2.03(.64)
	自己有能感				
	運動	道徳性	家事	養育	ユーモア
男性	2.85(.68)***	3.12(.52)	2.49(.64)	2.70(.46)	3.03(.42)
女性	2.19(.83)	3.01(.46)	2.83(.68)**	2.64(.62)	3.03(.55)

()内は標準偏差。全般的自己価値と自己有能感は最大4、最小1、権威主義は最高5、最小1。*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ で有意な性差がある。

権威主義：主成分分析の結果、全項目が1要因となった為、8項目の平均値を尺度値(1~5)とした($\alpha=.76$)。性別の平均値は表8に示す通りである。男女間に有意差はない($t(135)=0.25$)。

各指標による類型：相互独立性、相互協調性、全般的自己価値、権威主義の4変数を類別変数とし、ケースのクラスタ分析を行なった結果、研究Ⅰ・Ⅱの中年成人と同様に3クラスタが析出された。各クラスタ別に各変数の平均値を示したのが表9、それを図示したのが図5である。クラスタ1は表1に示した平均値に比べ相互独立性が有意に高く($t(50)=6.17$ $p<.001$)相互協調性は低い($t=4.80$ $p<.001$)群、クラスタ2は相互独立性($t(51)=1.80$)も相互協調性も($t=0.93$)差のない群、クラスタ3は相互協調性が高く($t(33)=3.87$ $p<.001$)相互独立性は低い($t=5.78$ $p<.001$)群と言える。自己価値はクラスタ1と2は同程度に高く、クラスタ3は低い。亦、クラスタ2は権威主義が他の2クラスタより有意に高い。尚、「運動」「家事」「道徳性」を除く自己有能感の各側面でも、全般的自己価値と同様のクラスタ間の有意差が認められた($F=10.17\sim 8.12$ $p<.001$)。

これらを纏めれば、クラスタ1は相互独立性優勢型であり、肯定的な自己認識が著しく権威主義傾向は弱い。クラスタ3は相互協調性優勢型であって、否定的自己認識が強く権威主義は然程見られない。これに対しクラスタ2は、一定程度の相互独立性と相互協調性の双方を持つ独立性・協調性拮抗型であると捉え得ると同時に、この群に属する個人は、自己肯定感が強いと共に他のクラスタに比べ権威主義が強い、と言う老人期と同様の特性を示していることが注目される。

全体的考察

相互独立性と相互協調性の水準：本研究は、日本人成人に於いては加齢と共に相互独立性は上昇し、相互協調性は低下する、と言う大量資料に基づく従来の知見(高田, 1999; 2000a)を前提として実施されたものである。亦、成人男性は女性より相互独立性は高く、相互協調性は低い、

表9 各クラスタの平均値

	相互独立性	相互協調性	自己価値	権威主義
クラスタ1 (n=51)	5.04(.59) _a	4.31(.56) _a	2.52(.64) _a	2.08(.39) _a
2 (n=52)	4.48(.61) _b	4.76(.54) _b	2.87(.59) _a	2.69(.40) _b
3 (n=34)	4.02(.52) _c	5.16(.70) _c	1.79(.41) _b	2.46(.56) _c
F値 (df=2,134)	34.84***	21.26***	48.03***	25.29***

()内は標準偏差。*** $p < .001$

異なるアルファベットを付した平均値間には多重比較(HSD検定)で5%水準の有意差がある。

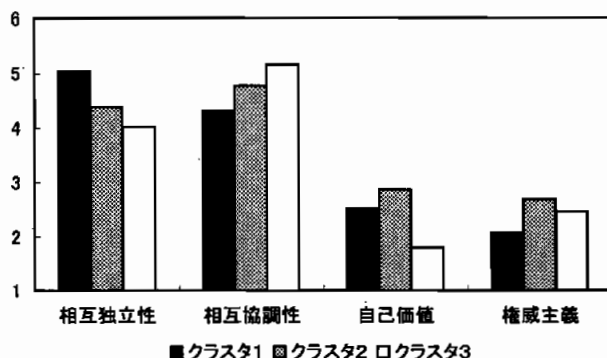


図5 各クラスタの特徴 (中年成人)

という性差も従来の資料では明白である。然るに、今回の資料では斯かる相互独立性と相互協調性の年齢差は、研究Ⅰと研究Ⅱの双方で有意な水準に達していない。亦、性差に関しても、研究Ⅱと研究Ⅲの場合、有意差は見られない。更に、相互独立性と相互協調性の水準自体に就いても、従来の平均値に比して、研究Ⅰの対象者は相互独立性が低い傾向が顕著で、女性の場合は更に相互協調性が高い傾向も認められた。逆に、研究Ⅱの中年女性の相互協調性は従来より低い傾向が著しい。

他方、研究Ⅰ～Ⅲの全対象者863名(若年成人459名(男性205名、女性281名)、中年成人404名(男199、女178名))を合計して平均値を算出した結果を表1に付記したが、この場合は相互独立性(年齢： $F(1,859)=9.17$ $p < .01$ 、性別： $F=36.64$ $p < .001$)と相互協調性(年齢： $F(1,859)=3.73$ $p = .05$ 、性別： $F=19.97$ $p < .001$)の双方とも、年齢×性別の分散分析で各要因の主効果は有意であり、従来の結果を追認している。このことは、サンプル数の増大による有意差検出の容易さの問題もさること乍ら、成人資料の場合、学歴や職業等の諸社会的要因が尺度値に及ぼす影響の大きいことを示唆している。因みに、今回の資料の対象者は、研究Ⅰでは幼稚園児の両親、研究Ⅱでは進学校の卒業生で全員大学卒、研究Ⅲでは私立大学生の両親である。従って、明確な証左は欠くものの、対象者の学歴は研究Ⅱ、Ⅲ、Ⅰの順で高いと思われる。高学歴者ほど相互独立性が高く相互協調性が低い傾向は従来から指摘されており(高田, 1999)、前述した研究Ⅰに於ける相互独立性の低さと相互協調性の高さ、研究Ⅱの女性対象者に於ける相互協調性の低さは、その為である可能性が大いにある。

併し乍ら、対象者全員の平均値に於いても、相互独立性の水準は従来のそれに比して有意に低いことは、表1に示す如くである。従来の成人資料は1994年から1998年にかけて収集されたものである故、今回の資料に現れた日本人成人の相互独立性の全般的低下傾向は、日本社会に於ける最近の傾向である可能性もある。研究Iの結果から示唆される如く、成人期に於ける相互独立性の伸長が人格的発達の指標の1つであるとするなら、斯かる傾向は軌近日本社会に於ける成人期の人格的発達の停滞乃至阻害を意味する可能性が考えられるが、何方にせよこの点に関しては、無作為抽出資料を含む資料に基づき、今後更に検討を加える必要がある。

成人期に於ける発達の類型：上記の如く、今回の3つの調査資料に於ける相互独立性及び相互協調性に関しては、資料の代表性に由来すると思われる調査毎の変動や、その全体的水準に検討の余地は残される。併し乍ら、相互独立性、相互協調性、肯定的自己認識に基づく類型が、各調査に共通して見出された。即ち、(1)相互独立性が相互協調性を凌ぐと共に肯定的自己認識が顕著な相互独立性優勢型、(2)一定程度の相互独立性及び相互協調性を具備すると共に肯定的自己認識も併せ持つ独立性・協調性拮抗型、(3)相互協調性が相互独立性を圧倒し、批判的自己認識が顕著な相互協調性優勢型、の3類型である。

更に、今回検討を加えた「親となる」ことによる人格的発達、反自己中心的規範意識、権威主義、の各変数も、この3類型と関連していることも分明した。即ち、若年成人の場合、親となることに由来する人格的発達が最も見られるのは相互独立性優勢型であり³⁾、独立性・協調性拮抗型でも或程度の人格的発達が認められた。亦、相互独立性優勢型では多少の反自己中心的規範意識が見られた。これに対し、中年成人では、反自己中心的規範意識と権威主義は独立性・協調性拮抗型に随伴している一方、親となる人格的発達が顕著な類型は認め得なかった。これらを纏めたのが表10である。

相互独立性及び相互協調性の発達に関する横断資料(高田, 1999)に基づけば、青年期には相互協調性が相互独立性を凌ぐが、成人期、就中、中年成人に於いては逆に相互独立性が相互協調性を上回り、老人期に至ると相互協調性が再び伸張して、相互独立性及び相互協調性は略同一水準に近づく。この発達経過に即するならば、相互協調性優勢型は青年期の、相互独立性優勢型は成人期の、独立性・協調性拮抗型は老人期の、夫々の特徴を最も体現した類型であると言える。斯く考えれば、今回資料の相互協調性優勢型に属する個人は、成人期に至るも未だに青年期的特性を残

表10 各類型の特徴

	若年成人	中年成人
相互独立性優勢型	肯定的自己認識 親となる人格的発達	肯定的自己認識
独立性・協調性拮抗型	肯定的自己認識 親となる人格的発達	肯定的自己認識 反自己中心的規範意識 権威主義
相互協調性優勢型	批判的自己認識	批判的自己認識

した、発達が停滞した者と捉え得る。同様に、相互独立性優勢型に属する個人は成人期の典型的発達相にある者、独立性・協調性拮抗型は老人期の発達の特性を先取りしている者、と考えることが出来よう。

実際、相互協調性優勢型に属する者は、若年・中年成人の双方で、青年と同様に批判的自己認識が顕著で、人格的発達も老人期的特徴も示していない。他方、始めて親となる経験は若年成人期に多いと思われる。果たして、相互協調性優勢型以外の若年成人は親となることによる人格的発達を示しているが、それが最も顕著なのは相互独立性優勢型に属する個人である。相互独立性優勢型の中年成人には斯様な傾向は見られない。他方、独立性・協調性拮抗型に属する個人の場合、老人期が目睫の間に迫った中年成人では、自己肯定感が強いと共に反自己中心規範意識や権威主義が強い、という老人期と同様の特性が示されている一方、若年成人では斯かる傾向は殆ど見られない⁴⁾。斯様に、文化的自己観の内面化過程に於ける成人期の位置に関して、その発達段階の個人差を示す幾つかの類型が存在することが示唆されるのである。

社会的表象と自己認識：近時、文化的自己観は日米間の文化差を説明する概念とは認め難い、とする論議が幾つか公にされている（例えば、Matsumoto, 1999；Takano & Osaka, 1999）。Matsumoto (1999) は、Markus & Kitayama (1991) のモデルは、(1) 価値、態度、規範等に係わる文化が自己観を左右する、(2) 自己観が個人の認知、情動、動機付けを決定する、という2つの過程を提唱しているが、彼等のモデルを支持するとされる実証的知見は、独立変数（日本と亜米利加、等）による従属変数（認知、情動、動機付け）との関係を示すのみで、その間に相互独立性や相互協調性の介在を確認する証拠は認め難いと断じている。亦、高野（1999；Takano & Osaka, 1999）は、実証的知見自体に日米間の差は見られず、「日米の文化差」に対する文化的自己観による解釈は不適切であり、状況への適応という観点から日本人の行動特性を理解すべきであると主張している。

併し乍ら、Matsumoto (1999) が総覧している研究は全てSingelis (1994) の尺度を用いて文化比較を試みたものであるが、当該尺度には明らかに日本人には不適切な項目が含まれている等、これを日本人に実施した諸研究の結果には疑問の余地がある（高田, 2002a）。一方、今回用いた高田他 (1996) の尺度は、文化間の然るべき差異を的確に反映しているものである（高田, 1999）。他方、高野 (1999；高野・苧坂, 1997；Takano & Osaka, 1999) が検討を加えている集団主義と個人主義に関する知見とは異なり、帰属過程や自己評価等、自己を巡る問題では文化間の有意差を見出した比較文化実験は多数あり（Kashima & Yamaguchi, 1999）、就中、Heine, Takata & Lehman (2000) は、自己高揚傾向と自己批判傾向に於ける日本人と西欧人との差を、大学生を対象とした実験を通じて明確に示している。同時に、この研究に於いては、日本人と加奈陀人の被験者に文化的自己観尺度（高田他, 1996）を実施し、前者は後者より相互協調性が高く相互独立性が低いことを確認しているのみならず、日本人被験者の場合は、相互独立性が低い個人ほど自己批判傾向が著しいことを見出している（高田, 2002a）。

これ迄の如く、文化と相互独立性・相互協調性の関連や、相互独立性・相互協調性と諸社会的行動と関係を検討し、文化に依る行動の差異に文化的自己観が介在する過程を検討した上記高田 (2002a) の如き研究は確かに少ない。本研究に於いては、社会的表象である文化的自己観が個人

の自己認識に内面化される過程に就いて、成人期での人格的発達という観点から検討を加えたが、これは、文化的自己観の内面化機制的検討(高田, 2002c)と並び、Matsumoto (1999)等の懐疑論への反証の1つとなるべきものであろう。本研究でも再び確認された如く、少なくとも尺度値の上では、日本人成人の相互独立性は相互協調性を凌ぐ。即ち、本研究の結果は、「日本人の集団主義と西欧人の個人主義」の如き往々耳にする単純な二分法を排する一方、社会的表象と自己認識の関係に就いて一定の知見を得たと同時に、今後の更なる検討を要請するものとして位置づけられよう。

注

- 1) 本稿研究Ⅰは日本社会心理学会第42回大会で報告した資料(高田, 2001b)を再分析したもの、研究Ⅱ・Ⅲは日本社会心理学会第43回大会報告(高田, 2002b)に資料を追加したものである。尚、本研究実施に際しては、平成12~14年度科学研究費(基盤C2:12610152)の助成を受けた。
- 2) α が.70以下で稍問題が残るのは「道徳性」「養育」「ユーモア」である。
- 3) 質問紙調査の限界として、親の発達尺度と相互独立性-相互協調性尺度の質問項目が類似している為の結果である可能性はある。即ち、前者の「自己主張」因子は、相互独立性と極めて近い内容を持つ。併し乍ら、「私の抑制」「他者との親和」等は寧ろ相互協調性と近い内容であることを考えれば、今回の結果を両尺度の質問項目の類似性のみに戻すことは出来ない。
- 4) 若年成人に於ける規範意識のクラスタ間の差異に関しては、その程度が小さく系統的でもないこともあり、現段階ではその原因を詳らかにし得ない

引用文献

- 藤崎眞知代 1999 子どものコンピテンスの低下傾向の要因分析 - 児童期から思春期にかけての横断的・縦断的検討を通して - 平成9・10年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Harter, S. 1985 Competence as a demension of self-evaluation: Toward a comprehensive model of self-worth. In R.L. Leahy (Ed.) *The development of self*. Accademic Press. Pp. 55-121.
- Heine, J.S., Takata, T., & Lehman, R.D. 2000 Beyond self-presentaion: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 71-77.
- Kashima, K. & Yamaguchi, S. 1999 Guest editors' introduction to the special issue on self. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 283-287.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格的発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 北山忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matsumoto, D. 1999 Culture and self: An empirical assessment of Markus and Kitayama's theory of independence and interdependence self-construal. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 289-310.

- Messer, B., & Harter, S. 1986 *Manual for the Adult Self-Perception Profile*. University of Denver.
- Singelis, T.M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 580-591.
- 高田利武 1998 アジア文化における相互独立性 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 282-283.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 -比較文化的・横断的資料による実証的検討- 教育心理学研究, **47**, 480-489.
- 高田利武 2000a 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, **8**, 145-163.
- 高田利武 2000b 文化的自己観と企業改革・従業員意識 松戸武彦・高田利武(編) 変貌するアジアの社会心理 -中国・ベトナム・日本の比較- ナカニシヤ出版 Pp.123-151.
- 高田利武 2001a 自己認識手段と文化的自己観 -横断的資料による発達の検討- 心理学研究, **72**, 378-386.
- 高田利武 2001b 日本人成人の相互独立-協調性と「親になること」による人格的発達 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 150-151.
- 高田利武 2002a 社会的比較に於ける自己卑下傾向と相互独立性-相互協調性との関連 -文化間変動と文化内変動は並行するか?- 奈良大学紀要, **30**, 97-107.
- 高田利武 2002b 日本人成人の相互独立-協調性 -類型化による検討- 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 706-707.
- 高田利武 2002c 社会的比較による文化的自己観の内面化 -横断資料に基づく発達の検討- 教育心理学研究, **50**, 465-475.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173.
- 高野陽太郎 1999 集団主義論争をめぐって -北山氏による批判の問題点- 認知科学, **6**, 115-124.
- 高野陽太郎・纒坂英子 1997 “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義” -通説の再検討 心理学研究, **68**, 312-327.
- Takano, Y. & Osaka, E. 1999 An unsupported common view: Comparing Japan and the U.S. on individualism/collectivism. *Asian Journal of Social Psychology*, **2**, 311-341.
- 与謝野有紀 2000 中国国有企業の「改革」と労働者意識の分化 -権威主義とヒエラルヒー絶対主義- 松戸武彦・高田利武(編) 変貌するアジアの社会心理 -中国・ベトナム・日本の比較- ナカニシヤ出版 Pp.71-95.

Summary

In spite of the predominance of the interdependent self-construal in Japanese culture, it has been found repeatedly that Japanese adults show rather high independence and low interdependence scores on the self-construal scale. In order to shed light on the principal characteristics of the independent self characterizing Japanese adults, the variables corresponding to high independence were examined through three questionnaire surveys. Base on cluster analysis of those variables, a tentative taxonomy of Japanese adults was proposed. According to this taxonomy, there are 3 types of Japanese adults, namely, (1) independence predominant type with low interdependence and high self-esteem, (2) balanced type with both independence and interdependence and high self-esteem, and (3) interdependence predominant type with low independence and low self-esteem. Younger adults categorized as independent type showed considerable psychological development as parents; where as, the middle-aged balanced type were characterized with anti-selfish behavior tendencies and authoritarianism; tendencies which characterize older Japanese. The interdependent type showed neither the parental psychological development nor the characteristics of the older persons.

